

氏 名	C H A N A		
学 位 の 種 類	博士（医学）		
学 位 記 番 号	甲第590号		
学位授与年月日	令和4年3月18日		
審 査 委 員	主査 教授	和田 耕一郎	
	副査 教授	原田 守	
	副査 准教授	矢野 貴久	

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

潰瘍性大腸炎（ulcerative colitis; UC）に対するタクロリムス（tacrolimus; TAC）の有効性は既に確立されているが、有害事象の一つである腎機能障害の詳細は明らかにされていない。申請者らは、寛解導入目的に TAC を使用した UC 症例の腎機能を後方視的に調査し、寛解導入中および投与中止後の腎機能の推移を解析した。2009 年 4 月～2019 年 3 月の間に、島根大学医学部附属病院において中等症～重症 UC として TAC が投与され、1 年以上の経過観察が可能であった 55 症例（年齢中央値 39 歳、男性 41 名）を対象とした。腎機能は推定糸球体濾過量（eGFR）を用いて評価した。TAC 治療により 67.3%の患者が 12 週以内に臨床的寛解を達成し治療効果は良好であった。また、eGFR の低下は投与開始 1 週間後よりほぼ全例で認められ、ベースライン値からの変化率は 12 週目で-20.3%であった。一方、TAC 中止後に eGFR は改善する傾向にあったが、中止後 2 年でもベースライン値までの回復には至らなかった。12 週目の eGFR 変化率に与える因子を多変量解析で検討したところ、年齢（ $\beta = -0.3242$, $p = 0.0103$ ）および TAC 投与中の最大血清トラフ値（ $\beta = 0.3563$, $p = 0.0051$ ）が有意な因子として抽出された。さらに、eGFR 変化率を高年齢者群（60 歳以上）と非高齢者群（60 歳未満）で比較すると、TAC 投与中および中止後 2 年間のいずれにおいても、eGFR 低下率は高齢者群で大きかった。